

政治家市長と官僚OB市長：権力行使とまちづくりの接点

南学（1977年横浜市役所入庁、2000年退職。以後大学教員）

はじめに

市区町村長と都道府県知事は、ともに、住民の直接選挙で選ばれるので、政治家であり、同時に、地方公共団体という「法人」の執行責任者としての行政職のトップでもある。地方公共団体は、地方自治法によって、住民の選挙で選ばれる「首長」と「議会（議員）」との二元代表制であり、地方議会は立法機能（条例制定権）をもつものの、大きな役割は予算や特別職人事の議決や同意という「チェック機能」となる。したがって、首長は予算と人事によって、その所管地域においては、「総理大臣以上の権限をもつ」と言われている。

そして、この権限行使に関して、都道府県では、「次」を目指す知事は2期以上続けないことが多く（北川知事、片山知事等）、「上がり」の知事は、どこまでも続けようとする傾向にある（長洲知事、平松知事など多数）。横浜市でも、政治家市長である飛鳥田市長、中田市長は「次（総理大臣）」をめざし、官僚OBの細郷市長、高秀市長は4選以上を目指した。

南と横浜市政との接点

多分1970年頃に、「市長への手紙」で市民プールの建設を要望し、その返事が来たことに感激し、さらに、「市長への手紙の会」に呼ばれて、市民と直接に話す市長の姿勢に親しみを持った。その印象から、いくつかの選択肢のなかから、横浜市職員を目指した。

当時は新任採用時に1ヶ月の研修があり、六大事業、宅地開発要綱、公害防止協定などの「革新的」取り組みを紹介された。研修終了時に同期に呼びかけて「都市問題を考える会」を結成した。この会は、田村さんによる1980年（多分）の「技術研修」の受講者を含めて「まちづくり研究会」に発展し、以後1990年代まで、15年以上続いた。

田村さんとの接点

横浜市に就職後、4月の中旬に東京大学出身者による「银杏会」で、田村さんに出会う。30人以上の全ての参加者と話をし、2次会で再び話した時に、最初の会話を覚えていたことに驚いた。その後、企画調整局係長の先輩を通じて、「行政問題自主研究」に田村さんを講師として呼び、議論したこともあった。田村さんの退職後は、毎月開催していた「まちづくり研究会」に田村さんは原則として毎回参加し、「まとめ」をしてくれた。その後の講師を交えた2次会での「懇談」での「裏事情」も含めて、まちづくりに関する考え方の基礎が身についたように思う。「まち研」では、200以上のケーススタディを現地視察や合宿を含めて行ったことになり、「事業仕分け」や現在の仕事にも非常に役立っている。

細郷市長との接点

「银杏会」での出会いと、1989年にロサンゼルスに留学した際、日米市長会議に参加した細郷市長と3日間ほどを過ごした。当時は、病気療養中であったが、健康に関する本を読み、内容を披露しつつ、先進国サミットの横浜誘致が目標（1993年か）と語っていた。2ヶ月後の一時帰国の際に、挨拶をしたが、歩行も困難なほどに病状は悪化していた。その後、90年2月に亡くなったが、最期まで市長を維持したことが印象的

高秀市長との接点

南の伯母の夫が、高秀氏の建設省河川課在職中の上司（課長）だったことから、市役所の先輩とともに、市長在職中に自宅や公舎をプライベートで訪ね、懇談を重ねる機会を得た。1期目の困難な時期を経て、2期目には当時の長洲県知事（5期、95年まで）のマネジメント手法に倣い、市長室に「調査等担当」を設置したことによって（94年）、その課長への就任を依頼された。2年余の市長室での仕事は、自治体のトップマネジメントを学ぶ非常に大きな機会となった。阪神淡路大震災後の災害対策で求心力が高まったことを肌で感じた。政策研究プロジェクトでは、兼務辞令方式によるプロジェクト方式を考案し、実施。後援会業務にも関わることになった。権力基盤が固まるとともに、弊害も感じるようになり、大学教員への転職を決意した。

中田市長との接点

2011年11月に、友人から紹介され、中田氏（当時衆議院議員）と会った。横浜市長選への出馬を検討しているということだった。行政主導型から、行政コーディネイト型への転換、閉塞感を打破して横浜から日本を変える、などの方向性を確認し、政策の柱をアドバイスした。「5兆円の借金」キャンペーンが成功し、僅差で当選。初登庁までに、各部局の最重点課題を説明し、初動体制の確保を図った。

中田氏は、常に、どのような施策や事業、「言葉」がマスコミに取り上げられるかを考えて行動したようだ。北沢氏とともに「参与」という立場で、週に1、2回「出勤」をした。

中田氏の功罪

大きな功績は、政権交代に伴う改革のエネルギーを、「1年で改革できないことは4年経ってもできない」という判断から、短期間に集約し、いくつかの成果を上げたことだろう。「地区計画」のルールづくり、港湾病院への指定管理制度導入、市立大学の法人化、起債発行の改革、日産本社の誘致（04年6月発表）、新時代行政プラン、アントレプレナーシップ事業など。

一方で、改革を実現した職員の「論功行賞」が十分でなく、不祥事には「公表して処分」を原則としたために、市長と職員の信頼関係は築くことができなかった。2期目の選挙では83万票を獲得したが、当選翌月から公職選挙法違反で市長室長と町田市長（元市職員）が取り調べを受けるなど、市政が混乱。週刊誌でのスキャンダル報道も続き、レイムダック状態に。「開港博Y150」の失敗もあり、09年7月辞職を発表。翌10年の参議院選挙に出馬するも、市内での得票は1万3千にとどまり、落選。

政治家型市長と官僚OB型市長の比較

飛鳥田市長と中田市長はともに、衆議院議員出身で、政党票よりも個人票が多かった。単純な比較はできないが、衆議院議員を目指す以上は、大臣、総理大臣を目指す（政治家としてのゴール）という共通点はあるのではないかと。したがって、最終ゴールに向けての「支持」を獲得・維持することが、市長職にあるときも、優先課題となる可能性がある。

細郷市長と高秀市長に共通なのは、長期的な視点をもった行政のプロとしての実力をいかに発揮し、周囲に認知させるか。さらに、自らの人生のモニュメントをつくることに関心があったのではないかと。特に命の続く限り、自身の「決断が仕事」と認識していたようだ。